



Title	キヤケゴーアの爪の痕：モウエンス・ポウルセン 『キヤケゴーア的運命の人々』に関連して
Author(s)	大谷, 長
Citation	大阪外国語大学学報. 1961, 10, p. 71-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80189
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

キヤケゴーアの爪の痕

——モウエンス・ポウルセン『キヤケゴーアの運命の人々』に関連して——

大 谷 長

Tilegnelsens disciple af Kierkegaard.

—Angående Mogens Poulsen: Kierkegaardske Skæbner 1955—

af Masaru Otani

Oversigt

Når der er givet beskrivelser som——selvom de ikke i egentlig forstand behandler om Kierkegaard, men tilsyneladende bortset fra Kierkegaard selv, og kun om mennesker, der på en eller anden måde var påvirket af ham og så at sige var indstillet på hans periferi——meget rørende skildrer menneskelige bekymringer, består da hensigten i at ville henlede vort blik på tilegnelsens vej til Kierkegaardsk eksistentiel redelighed——den var måske en eller anden ensom sidevej, men den samme redelighed blomstrer der.

Poulsens bog er af den art. Han har tegnet gribende portrætter af nogle mennesker, der middelbar, umiddelbar eller netop skæbnebestemt er påvirkede af mødet med Kierkegaard.

Især i tilfældet Ilia Fibiger, denne ild-billede, er Poulsens sympatiske eftersporing glimrende, skønt han har overset Emil Boesens beretning om den syge Kierkegaard på Frederiks Hospital, hvor der fortælles om Ilia Fibiger og hendes blomster som gave til Kierkegaard. Besynderligt nok sammenstilles her i forhold til den døde disse to særprægede skæbner. Hvor var det ikke eskatologisk!

Desuden har Poulsen henledt vor opmærksomhed på en endnu uudgravet Kafka (Ernesto Dalgas).

キヤケゴーアの死後百年以上を経過した今日、我々は彼を単に客観的に研究する事だけで満足せずに、彼の業績を実存在的にわがものにする事も要求されていると考えられる（——それが正しく彼自身の意図であった如くに）。キヤケゴーアについてただ徒らに喋るのは、今日においては殆んど人を疲れさせるだけである。一見キヤケゴーア自身を離れ、謂わばその周辺に焦点を合せて、そこに誠に美しい人間的関心を掘るような叙述がなされる場合、それはキヤケゴーアのそうした実存在的誠実さへの同化的所有の道——それは寂しい間道かもしれないけれども、そ

ここには同じ誠実の花が咲いている——に人の眼を誘わんとしたの事である（ラジオ講演をもとにして編まれたポウルセンのこの本も又そのようなものの一つである）。キヤケゴーアの去った後、思想家や詩人の上に残された彼の痕跡に就ては、既に多くの論述がなされた。けれども、彼の鋭い爪の痕となった目立たない人々もまた、ここに思い出されねばならないのである。何らかの仕方、キヤケゴーアとの出会いによって運命の決定された（skæbnebestemt）人々、その才能はそんなに輝かしいものではなかったが、然しそれだけにその内面性は一層強かったらうような、殆んど忘れられた、運命の人達（Skæbner）。

先づ最初に Emil Boesen. 彼はソェーヤン、キヤケゴーアの最良の友であり、キヤケゴーアがその父親に就て、又婚約相手のレギーネ・オルセンに就て、心を割って語り合う事の出来た唯一人の者であった。そして彼は又キヤケゴーアがその死の床に来る所を許したごく少数の者（実兄のペーダーすら近づく事が許されなかった）の一人であった。ボェセンはキヤケゴーアの周囲にあった例外的な運命共存者である。両者の交遊は、遠く父親の代に基を持っている。父親ミカエル・ペザーセン・キヤケゴーアがスドームギャーゼ（Stormgade）でのヘルンフート集会場に出入りしていた時、エミール・ボェセンの両親もそこに来ていたのであり、かくして両家の友情の絆は結ばれ、エミールとソェーヤンは親しく近ずいて行ったのであった。

両者の親交には、子供の頃似た点が種々あった事によって一層促進されたと思われる。エミールは生長期に虚弱であり、長期にわたって田園で療養した事がある。華奢なソェーヤンは攀じ登った木から落ちて、終生悩む事となった背骨の傷害を受けた。又両者は共に孤独な子供だった。エミールは病氣回復後、硬直した合理主義者である所の、フュンの一牧師の家に来る事になったが、彼は内気で黙りっぽくなり、郷愁の念に悩んだ。そして彼が遂にコペンハーゲンのヘルンフートの父母の家に帰る事が出来た時、彼は救われたと思った。ソェーヤンの学校時代に於ける孤独は、逆に彼をして身を護るために辛辣な舌、早くから発達した皮肉、を帯びしめた。彼の渾名は「フォーク」であった。

エミールもソェーヤンも、神学の勉強を選んだ。尤もエミールが5年間の勉強の後に牧師候補者となったのに対して、ソェーヤンが卒業最終試験を受けようと決心するまでには12年間かかった。然しエミールもまた、神学の外にある世界に眼を閉じたというのではなかった。エミールが1845年に出版した一書『コルネリウスの手紙に於ける宗教的な人生発展、Zによる出版』は、形式及び内容に於て、キヤケゴーアの著作活動の影響を漏らしている。

両者は絶えず手紙を交わして来た（残念乍らエミールの方からの手紙は今日失われている）。1849年にエミールがホルセンス（Horsens）の定住牧師補に任ぜられて以後、両人の交誼は専ら文通による事となった。キヤケゴーアが如何にボェセンの苦楽に意を用いたかを見るのは、人を

感動せしめるものがある。キャケゴーアは、ボェセンが偉大な視野の広い人物だとは思っていなかった事は確かだ、けれども彼はエミールが好きだった。ボェセンは洗練された気品の高い人間だったし、それに善良で忠実な聴き手だったのだから。

二人の友が最後に相会したのは、1855年10月キャケゴーアの死の床に於てだった。ボェセンはその妻に書き送った。「ソェーヤンは自分の思う事を述べるために、私を求めているように思われた。永年にわたって彼の親友であり、彼からこんなにも離れていた私が、今、恐らく彼が死ぬと思われる今、彼の懺悔聴聞師になるためのように、ここに来たというのは、全く不思議な事だ。訪問はいつも強い印象を私に与える。彼の語る多くを私は他へ伝えないようにしなければならぬ。」と。間もなく彼はキャケゴーアの死の後報を、ホルセンスで、キャケゴーアの甥の若い医師ヘンリク・ルンから受取ったのだった。

キャケゴーアの死後6年にしてボェセンはホルセンスの牧師になり、次で1863年にオーアフスの副監督になった。彼は卓越した説教者になれた筈だが、彼の主要な努力を霊的司牧者として鍛練した。彼はキャケゴーアから、就中、中心となるべきものは「単独者」であるという事を学んだ。そしてそれ故に、ボェセンの司牧の業は内面に向わしめられた。ボェセンは決してキャケゴーアを忘ず、友のあらゆる思い出を敬虔に保持した。もし誰かがこの天才的思想家、偉大な教会懲罰者を悪しざまに言ったり、貶しめる時、彼は聞き流しはしなかった。彼は1877年に退職してコペンハーゲンに移り、4年後に亡くなった。

次に、第二の運命人 Ilia Fibiger. 彼女は1817年10月5日にコペンハーゲンに生れた。兄の Adolf は才幹とユーモアに富み、且つ極めて感情豊かな図案家だったが、彼の友人達でこの家庭に出入りした当時の天分ある若者達と、イリアは知己となった。就中、画家 Læssøe, 政治家 Orla Lehmann (彼は、キャケゴーアが1836年に Kjøbenhavns Flyvende Post に発表した4つの政治的論文に関して、彼と論争する事になる)、詩人 Carl Ploug, 牧師にして詩人 Johannes Fibiger (筆者註。イリアのいとこであり後にキャケゴーアの敬慕者となった彼に対して、1870年に Wilhelm Marstrand が宛てて書いた手紙の書簡箋の1枚に、マールスドランは回想によってキャケゴーアの肖像スケッチのグループを画いたが、2つに引裂かれたこの書簡箋の片方は、永らく既に失われたものとされていた所、発見されて、今日キャケゴーアの容貌を知る上に重要な役割を果たしている)、後のデンマークの大画家たる右の Wilhelm Marstrand などがある。年若かったが早熟でそして特別に知的だったイリアが、彼等に強い印象を与えた事は、疑いない。

両親が離婚する事になったため、家庭的には幸福ではなかったが、11人の子供達の大部分は、深い個性と高い天賦によって、それぞれ自己の立場を維持する事が出来た。彼女の妹の Mathilde

Fibiger は、『クララ・ラファエルの手紙』(Clara Raphaels breve 1850) によって、デンマークに於ける婦人解放運動の偉大なパイオニアとして知られている。

イリアは強い純な感情の持主だった。彼女はそれを後に、広い又独自の博愛的活動に於て、実践に移す事になるのである。彼女の運命の基は、彼女が出遭いそして彼女の全存在に永遠の傷痕を残した悲しき恋に、求める事が出来るだろう。彼女は16歳の時、Wilhelm Marstrand の弟 Osvald Marstrand に恋した。彼女の情熱は猛烈で、或る時彼が遠くからやって来るのを見た時、心の動揺のために気絶したと言われている程だった。だが残念な事に、彼女の強い感情は報われなかった。兄のアドルフが直接に彼の所へ行行って、彼女のために結婚を申し込んでいたので、彼は彼女の感情の性質を知っていたのではあるけれども。オスバルは、彼女の人間としての特性に高い価値を置いていたが、彼の側からはそれは愛ではなかった。彼は3年戦争で亡くなった。イリアは、彼女の不幸な愛を、自分を輝す光のように掲げながら、殆んど不合理の限界へまで彼女の熱情と自己否定の実践を続けようとする。

アドルフが28歳で惜しまれつつ結核で世を去り、両親の離婚やその他の煩瑣事は、イリアをして、如何なる力と強さと忍耐が彼女の中に住まっているかを自他に示す豊かな機会たらしめた。変質的でイリアを嫌ったが今では病む身となった母をば、イリアは夜となく昼となく看護した。この時期に彼女は文筆に親しみ初めて、悲劇や詩を書いた。然し、それは手慰み以上のものではなかったが。

1853年にコペンハーゲンにコレラが襲来した。当時衛生施設は最善ではなかった。人々は必要な手当ても受けずに倒れ、堆積をなして死んで行ったと語られている。病院では婦人職員が恐怖に打たれて逃亡し、全ては混乱と壊滅であった。その時、尽力せんとして挺身尽瘁した1人の者があった。それがイリア・フィビガーであった。或る日、全市の最も陰悪な黴菌の巣窟たる市民病院に彼女は出頭して、勤務医師に向って自分が雑役婦になりたいと申し出た。ヨハネス・フィビガーの語る所によれば、医師は彼女の美しくか細い容姿を見て驚き、熱心に思い止まる事を勧めた。彼女は望みを固執した。彼女は死を怖れる所は少しもなく堂々と勤務した。彼女は黴菌は恐れなかったが、最も悪い事は、良質の者の不足のためにコペンハーゲンの滓の中から募られた他の雑役婦に混って働かねばならぬ事だった。彼女等の汚い言葉を聞かないために、イリアは幾度か窓から首を突き出した事だろう、そして遂には竊盗の罪を被せられもした。

コレラが終熄した後、彼女はフレズレグス病院に配属せしめられた。初め彼女は自分の教養と職務の矛盾に不安を感じた。然し、夜間看護婦の靴下に至るまであらゆる事に気を付けようと決心する。そして彼女は6年間この地位に挑み続けた。そして彼女は論なく有能であった。彼女の温かい手を額に感じた患者達は、長い夜々に神自身が天使を差し使わし給うたのかと感じた、と

語っている。後に彼女が病院の静かな自分の部屋に座っていた時、彼女はソエーヤン・キヤケゴーアの著書を読んで、深く捉えられた。彼女はこの偉大な思想家の弟子となるに到った、というのは、キリスト教は我々を苦難と自己否定の道へ導くという点に於て、彼女は完全に彼に従い得たからである。

フレズレグス病院の看護婦長として、彼女は1855年10月—11月に、病めるソエーヤン・キヤケゴーアその人を看護した。けれども、彼女が彼と近い接触を持つに到ったかどうかは疑わしい。キヤケゴーアは余りにも疲れて居り、余りにも身体的に衰弱していたので、彼の頭はただ僅かの旧知の人々のみを容れる事が出来ただけだろう。ポウルセンは言及していないけれども、エミール・ボエセンの書いた病院に於けるキヤケゴーアの記述の中に、イリア・フィビガーの事が出て来る（不思議な事に、今や死せんとする者に関連してこれら2人の特殊な運命人がここに相会しているのである。それは何と終末論的でなかった事があろう！）ので、今その部分だけを抜き出して見る——

「フィビガー嬢が彼に花を贈っていたが、それを彼は戸棚に仕舞わしていた。」

「彼はフィビガーが贈った花の方を見た、けれども水に漬けさそうとはしなかった。『花が、咲き、匂い、枯れるのは、それは花の運命（Skjebne）だ』」

「フィビガー嬢の花は彼を喜ばした。『夜分は彼女が看護婦長（Overvaagekone）だ。昼はこの花が私を見守っている（vaager hun over mig）』。そして、看護婦長は彼に、それ以上の事を言った。花はあなたの為に泣いていますよ、と。」——

イリア・フィビガーは、看護婦長としての職務をやめた後、当時全く斬新で且つ非常に独自の活動圏を作った。彼女は母親になるという強い渴望を持っていたが、彼女はそれを、棄て子を引取るという事で癒そうとしたのである。新聞を通じ、又、公共扶助局や養育施設で、彼女は漸次6人を得た。だが、孤児院を設けるというのが、彼女の意図ではなかった。小さい者達が完全に彼女のものになるべきだったのである。彼女は労働者住宅に2、3の小部屋を借りた。そして生活の資を得ようとして勇敢に戦った。ヨハネス・フィビガーの伝える所によると、1人の子が彼女の心に特に親密に思えた。それは裸のままにいるのを階段で見つけ出されて警察へ渡された女の子だったが、イリアは直ぐさま局に行って引渡しを得た。その子が彼女の名と、夢想の子の父親の名の両方を持つというのが、彼女の願いだった。それで、その子は *Oswalde Fibiger* と呼ばれる事になった。彼女は *Oswald Marstrand* を忘れなかったのである。

イリアが色々の煩らいを嘗めるのは避けられなかった。子供達の縁者の或る者が金で彼女を圧迫しようとした。然し結局子供達を養子にする事に成功した。彼女の犠牲的行為は当然大きな賞讃と同情を呼び、彼女に援助を与えようとする者が多くあったが、彼女は全体を是非自分でやっ

て行こうと思った——それは何といても彼女の変った所だった。彼女は確かに实际的ではなかった。そして彼女の夢想し熱望した事の多くは、全く実現出来なかった。彼女は、子供達を貧民救済手段の浅ましきから救い出そうとしたばかりではなく、同時に、精神と理想主義の寵った計画によって、彼等を高めようと望んだのである。之は実現が不可能だった。彼女には1人1人を世話する余裕がなかったのだから。彼女はホームを支えようとして絶望的に戦ったにも拘らず、それは朽ちた。子供達は腕白者になり、泥にまみれた。

かくして子供の1人が死んだ。埋葬の後、彼女はジッと坐ってその場に頂垂れていた。雪くずが彼女のボンネットに舞い落ちて来た。彼女は疲れ果て、痩せ衰え、病弱だった。彼女は書かねばおれなかった——

私は人生の春に死に去らぬ、
人生の夏に於てすらもまた。
ああそればかりか。私は嵐に裂かれて立っている、
秋がやって来る時に。

最後の一葉がクルクル舞い去るだろう、
私が墓の中でウトウトする前に。
おお、何と私はうれしい事だろう、
死がやがて迫り来る時に。

(Jeg går ej bort i livets vår,
end ikke i dets sommer.
Ak nej. Jeg stormforreven står,
når efteråret kommer.

Vel hvirvles hen det sidste blad,
før jeg i graven blunder.
O, hvor vil jeg dog være glad,
når det mod døden stunder.)

1867年の春、力はもはや続かなかった。死の床で彼女は Oswald Marstrand の名を呼んだ。そして、全生涯を通じてこの唯一つの恋に忠実だった事によって彼女がどんな苦しみを嘗め又戦

利を得たかを、手短かに述べた。最後まで彼女はキヤケゴーアの思想を堅持した。彼女はキリスト教をば人類愛のための自己犠牲と理解した。そして彼女はそれを優れて実践に移した。彼女に取ってはキリスト教は業であって理論ではなかったのだから。ソエーヤン・キヤゴーアとイリア・フィビガーとの関連に就て Svend Leopold は言っている。「だがキヤケゴーアはやはり1人の弟子を持ったのだ。ここコペンハーゲンの白熱の理想主義者、可愛いフィビガー嬢、彼女は自分の生涯に、キヤケゴーアの偉大なモットー『これか―あれか』を置いたのだ」。1人の女性が彼に従ったのだった。

第3の運命の人も女性である。Mathilde Leiner. 彼女の歴史もまた外面的には決して劇的なものではない。1人のコペンハーゲン生れの語学女教師が、1人の文学批評家の乱雑で不規律な生涯に対して持っていた意義が語られるのである。話は1844年の聖霊降臨節、チボリ遊園地に於て初まる。Mathilde Leiner と Peder Ludvig Møller は、両方の共通の知人によって、お互に紹介された。彼等の住居が偶々近隣であったので、両者の関係はその後容易に強められて行った。マチルゼ・ライナーの専門はフランス語だったが、ドイツ語に対しても深い知識を持っていた。そしてモエラーと知合いになって間もなく、モエラーは彼女に自分の作品の若干をドイツ語に翻訳する事を頼んだ。モエラーの魅力的な人柄と生々した物腰に強く惹かれたマチルゼは、直ぐさまこの仕事に取かかり、それによって交友と共働が開始された。そしてこれは21年後に彼が死ぬまで続いた。彼は、彼女に、往時のいい意味での欲心を求め、彼女に詩や書物を与えた。1845年の春の宵、モエラーは彼女を王立劇場に招待した。ヘンリク・ヘルツの「ルネ王の娘」が出しものだった。マチルゼは書いている。「翌日彼は私とだけ逢った。そして私達の心は語った」と。

だが Peder Ludvig Møller とは何者であるか？ 彼は洗練された文芸批評家であり、彼の書物は今日でもそれを読んで得る所がある。だが彼はその当時のコペンハーゲンに於ては人気はなかった。彼は、独自の見解によって、たとい当時の趣味方向に逆行しても自分の判断を下した。彼は大変美しい男だったと言われている。だが何か悪魔的な冷たいものがこの美しさを覆っていたとされる。彼がソエーヤン・キヤケゴーアとの間に経験した猛烈な文学的衝突は、彼の運命に対して決定的な意義を持った。モエラーが「ゲア」誌に書いたキヤケゴーアの『人生行路の諸段階』に就ての余りに個人的な悪意に満ちた暴露批評文は、キヤケゴーアをして、悪評高いスキャンダル新聞たる「コルサール」の陰の協働者としてのモエラーを明示せしめる事によって、モエラーはデンマーク知的社会において高い地位を得る希望を失わしめられる事になった（彼はコペンハーゲン大学で Oehlenschläger の後継者になる見込みを懐いていたのである）。然し彼等両

人は以前、同じクラブに出入して論議を交した仲間であったが、Frithiof Brandt 教授の研究『若きソーヤン・キヤケゴア』によれば、モエラーは、キヤケゴアの『これか—あれか』の中の「誘惑者の日記」の主人公ヨハネス（誘惑者ヨハネス Johannes Forfðeren）のモデルであるという想定がなされ得る。実際、当時デンマークに於ける彼の経歴として顕著なのは、穏健に言って、女性に対する全く観念的とは言えない関係であったのは、確かである。モエラーは或るお針娘と婚約したが、その娘は病院で死んだ。その後で彼は彼女の髑髏を売った、と語り伝えられた。この話は何も根拠があるものではない、けれども、それは人がどんなにモエラーを見ていたかを、示している。彼は性愛遊戯にはすぐ手を出した。そして、何でも食い、だった。ブランド教授は、1848年にモエラーの子供を生んだ女性の手紙を公表している。正字法は全く支離滅裂である。だがその下手さにも拘らず、その手紙は感動を呼ぶ。子供は僅か数日で死んだ。そしてその母はモエラーに埋葬費用の援助を乞うている。だが、その時彼は既に外国に出立して居り、その旅から彼はもはや二度と故郷へ帰らない事となったのである。

マチルゼ・ライナーが彼女の運命を結び附けたのは、このような男に対してだった。外面的には彼等は早く離ればなれになった。マチルゼは旅立ち、2年間外地にあった。モエラーはパリーで彼女に逢うと約束していた。然し彼は来なかった。次の冬、彼女はローマで彼に再会しようと待った。だが彼女は再び失望させられた。彼女がコペンハーゲンに帰った時に、彼はハンプブルグに出立していた。

モエラーが外地からマチルゼに送った手紙は、冷たく、商用のような形であった。彼女が彼から返事を得るまでには、彼女は二度三度と手紙を書かねばならなかった。彼女が彼の事を何一つ聞かずにひととせが過ぎ去る事もあった。やっと手紙が来たかと思えば、その内容は、自分の仕事を翻訳してもらえぬ愚痴だった。けれど彼に対する彼女の感情は冷えなかった。或る手紙の中で、マチルゼは「結婚」という言葉を言った。彼は答えた、「私はあなたに沢山の事を赦してあげるように正当化されていると思う。あなたが結婚という事で私に奉仕しようという陳腐なウィットもそうだ。ああ、結婚。あなたは結婚が贅沢品だという事を知っていますか……分るでしょう、私はそれ程詩人として夢想したいと思っているのだし、私はそれ程現実生活に於て冷静なのだ」と。マチルゼは、又してはモエラーを巡って起る曰く附きの話の若干に対面させられた。マチルゼはそのようなゴシップが本当だとは信じようとはしなかった。そしていつも言った、「彼は噂よりも善良なのです」と。

1865年の夏、彼等は再びパリーで逢う事になった。彼女は告げている、彼は大変老けた、そして書き物を沢山したために弱った手を始終託っていた、と。彼の方は、彼女の言うに足る程も変っていない容姿に驚き、そして「なぜあなたはもっと早く来なかったのだ、そうしたら私はデン

マークへ帰っただろうに」と叫んだ。彼女は、喜んで彼の共働者になる事を続けましように言った。だが両者に明かだった事は、コペンハーゲンでは共働は唯一つの仕方、つまり夫と妻として、のみやれるという事だった。彼は非常に弱っていたけれども、彼女は相変らず結婚を望んだ。彼女は、彼がこの上もなく看護と世話を求めているのを見たのであった。彼等は5日間一緒に居た。彼女は語っている、彼は殊に彼女の訪問の最後の頃元気を落した、彼女の肩に頭を凭せて泣き出しすらした、と。シュトラスブルグから彼女は彼に慰めの言葉を少し書き送った。だが彼は慰めてもらおうとは欲しなかった、「私に慰めを言ってくれるな。それは悲しむ事を知らない弱小な心に対してのみあるものだ。あらゆる慰めはナンセンスだ。揺籃の中の子供のためのものだ。真の苦痛は悩むのだ、なぜなら、それは悩む事を望み又悩まねばならぬからだ——それは生命を短かくする、だがそれを一層高くする——それは慰めを卑しめ嫌うのだ」。

マチルゼはコペンハーゲンに帰って来た。彼女は幾度も彼に手紙を書いた、だが返信はなかった。1865年10月の半ば、彼からの最後のものとなった手紙を受取った。それには文学と病気の事が述べてあり、彼は金を乞うた。彼女は直ちに所要の金額を彼に送った。モェラーは極度の困窮にあった。彼の後年は、放恣な生活から直接に及んで来た脳髓病に悩む年月だった。1865年の秋、従ってマチルゼが彼を訪れた直後、彼の全ては崩壊した。彼が救われるべきなら、療養が絶対に必要だった。彼の以前の愛人の1人が、彼に同情して、彼をバリーから送り出そうと配慮した。けれども病状は無情に昂進した、そし12月6日に彼は亡くなった。マチルゼ・ライナーの名は、彼が書いた最後のものだった。

その間、マチルゼはコペンハーゲンの住居にあって、モェラーのデンマークへの帰還が進む事を期待していた。11月の終りに彼女は手紙を書いて、もし金があるなら、その頃バリーに居た或る卸商人に彼が申し出ればよいと言ってやった。手紙は彼の居所に届かなかった。彼の死の報知を、マチルゼは新聞で見た。

1866年の4月、彼の遺稿及び原稿が彼女に送られて来た。彼女はすぐ後で、モェラーが死んだフランスの病院に手紙を書いた。彼女は、彼の墓が異国で知られないままに忘れ去られてしまうのに満足出来なかった。そして彼女はそこに一番小さい墓標を立ててもらった。これだけが、マチルゼが一生涯尊敬し愛した男に対してした事ではなかった。彼女は彼の残された文学作品を浄書し、それが印刷されるのに協力した。数年後マチルゼ・ライナーは死んだ。最後まで彼女はモェラーからの手紙を保存していた。それらの手紙には、若い日々の彼等の間の恋愛関係であったにも拘らず、彼女に「あなた」と呼ぶ事が最後まで変えられてはいなかった。

「誘惑者ヨハネスと婚約して」と題されるこの章の主想はここで終る。けれども筆者の感慨はなお続く。「コルサール」を籍りてキヤケゴーアに死苦の打撃を与えた挙句に国を逃れ去った後

に於ても、モェラー自身、キャケゴーアに憑かれてはいなかっただろうか？キャケゴーアの持っていた真実に、彼は最後まで追われてはいなかっただろうか？キャケゴーアのような人格と一度でも真剣に格闘したという事、それは決して彼の生存から拭い去る事の出来ない痕跡を残したに違いない——たといそれが彼自身の性格に色どられて反逆的な悪魔的な表現を取ったとしても。然り、そのような「死に至る病」こそは、正しくキャケゴーアの落し子であったと言わざるを得ない。そして Mathilde Leiner, 彼女, Johannes Forf~~r~~er~~e~~n の婚約者, は, チボリの淡い陶然たる電飾の下, 若い夏の宵での彼との最初の出合いから, 21年後の悲惨なフランスの彼の生活に到るまで, 終始彼をば倫理的段階へ導こう (f~~u~~re) として一生涯を捧げたのだ——彼女はそれを果す事が出来なかったけれども。否, 寧ろ次のように言う方が正しい, 彼女はそれを果したのだと, なぜなら, モェラーの彼女に対する格闘は, 正しくキャケゴーアの誠実さとのそれだったのだから。

人間の運命というものは、プレミアム付きで珍重されるものではない。死んだ者の名は去年降った雪のように忘れられて行く。今日 Ernesto Dalgas の名を知る人は少い。けれどもデンマークのどんな子供でも、彼の父、ヒース開拓の先駆者 Enrico Mylius Dalgas の名を知らぬ者はない。だが、この場合にはこの父にしてこの子ありだ、彼等は嘗て殆んどお互に理解し合った事がない程、別の世界に住んでいた。

エァネストは早くより孤独を意識した。学校では、彼は独り離れて隅に立ち、遊ぶ仲間達を見守った。そして彼は死ぬまでそのような孤独の内にあった。彼は書物の世界を跋渉し、巨大な数の文学を読んだ。早くより彼はソェーヤン・キャケゴーアに没頭し初めた。そして、この偉大な宗教的天才との出会いによって刻印されたが、然し根本的に彼の個人的な独創性を失うという事がなかった。1871年6月22日生れの彼は、1889年に医者勉強をするためコペンハーゲンに来た。彼はここで更に哲学に熱中し、益々深い関心を以て宗教問題に身を向けた。彼は存在の最も大きな謎の或るものを解くために全力を尽し、彼の熟慮は認識の極限にまで達した。そして彼の思考の働きは、漸次強度を強めて、遅かれ早かれ彼の精神を破壊してしまう度合いにまで進められたのだった。

エァネストは、静かな慎み深い若者だった。彼はその短い生涯に交わりを結んだ余り多くない人々に、強い印象を与えた。1人の作家は言っている——私が出会った人の内で彼程に同情の深い人は稀だ。それは彼が賢明で思索的で博学であったからではなくて、彼の心の美しさのためである。彼の顔に現れている純正で深い人格は、彼の外貌に輝き渡って居り、又彼の声の特異な響きの中に感じられた。私はその響きをずっと後年の今でも、時々不思議な音声として聞くよう

な気がする、と。1894年に彼は医学と袂を分った。彼は高等学校の教師になろうとしたが、「正しい信念」を持っていなかった事を知るに到った。哲学の懸賞課題に応募する事で、彼は Harald Høffding 教授の関心を惹き、温い友誼を得た。彼はこの懸賞課題によって、著述の興味を刺激された。だが、彼はホンの短期間だけ普通一般の生活と接触した——彼の婚約はすぐに解消されたのだから。ソーヤン・キヤケゴーアと同じように、彼は「一般的な事を実現する」、即ち結婚する、事は出来なかった。

そして破裂が来た。彼は4ヶ月間オーアフスの精神病院に収容された。彼は癲癇の発作に襲われた。けれども彼はそれを周囲に隠す事が出来たと言われている。彼はその半ば自伝的な小説『苦悩の道』に於て、それらの発作に就て叙述している。それは、精神の錯乱傾向を感じている者の描いた自己症状に就ての稀な美しい文学的表出でもある。この絶対に重要な小説『苦悩の道』と、そして『最後審判の日の書』は、彼の友人 Axel Mielche によって、1903年に彼の遺稿の内から出版された。

『苦悩の道』は、熟慮の末、諦念と貧窮を選ぶ1人の人間を取扱う。Salomon Simonsen は隠遁的な清教徒ではない。然しキヤケゴーアと同様、「主体性が真理である」事を認識して、密やかに生活しようと欲する。彼には外面的に自分の値打ちを発揮し得るための能力と機会がないのではない。彼は心理的事情でそれをやらなかったのであって、町で収入役として生活を立てようとする。彼の生涯の晩年に、彼は自分の身の上話を書き附ける。サロモンは嘗て法律を勉強していた時、Prosa という奇妙な名の娘に恋した。だが恋愛にもまた彼はしりごみをする。キヤケゴーアはレギーネを彼の憂愁を負わせて苦しめようとは欲しなかった。そして、サロモンはブローサとの訣別に同様の動機を持っていた。数年後、彼は彼女に再会する——彼女は世界的なピアニストになっていたが、サロモンを忘れていなかった。『苦悩の道』のこのような筋は、本来のものを包む枠に過ぎない。即ち、この本には宗教的、形而上学的性格の一連の論文が含まれている。これらの論述の中で、サロモンは最も深い視角から見た存在を取扱っている。何度も彼は、キヤケゴーアの「宗教改革による道徳的進歩とその結果」という皮肉な題の一章に於て人が特に出会うキヤケゴーアの思考世界へと、帰って行く。前世紀の50年代にキヤケゴーアが「公的キリスト教」に対して大砲を向けた時、彼は稀な政治的才能だったが、エァネストはそれに劣らなかった。ルッター主義に対する彼の批判は、キヤケゴーアのように情熱的ではなかったが、同じように腐蝕的だった。この論文の帰結は、偉大な古昔の諸宗教に永続的な価値を与えるものは形而上学ではない、不滅なのは、これらの古い教えに言い表わされんとしている生の経験である、という事であり、これらの諸宗教は、人に対して生に於ける目標と手段を教え、善と悪の間、義務のこれか—あれかと怯懦のこれも—あれもの間に、考量区別をする事を教える所に価値があり、

之こそは、イエスの教え、仏陀の教え、孔子の教え、ソクラテスの教えの内容に外ならない、と。キャケゴーアに取っては、信仰は偉大な情熱であった。エァネスト・ダルガスに取っては、それはそうではない。この才幹豊かな若者が、多くの哲学的又宗教的諸体系を通じて広く探求の道に従うのには、殆んど悲劇的なものがある。彼の知的な理解能力は灼熱的發展をする。然し彼は、悟性が把握出来ないものを信ずるという事はないのである。『苦悩の道』は最後に、誇らかなそして男らしい運命への服従に終わっている。サロモンは言う——怯懦な者は永遠の苦痛を避けんとて偶像の前に匍わしめよ、死期の静けさに於てすら渴望を抑えるべきを学ばなかった飽く事を知らぬ者には永遠の幸福を叫ばしめよ、だが賢者は何ものをも求めず又何ものをも恐れない、死が夢なき眠りのように穏やかで安らかなものならば、彼は幼児の夜に対する如く死に備えよう、又死が生存の継続なら、既に死せる賢者達に耳傾けて真理への自らの探求を続ける事だろう。

エァネスト・ダルガスの創造したもう1つの主作品『最後審判の日の書』は、その構成に於てよく『神曲』を想わせる所の想像以上に深遠な小説である。巡礼者 *Peregrinus Peripateticus* は、実存在の世界を遍歴し、あらゆる世界宗教と哲学思潮の主導者に出遭う。神秘家マイスター・エックハルト、神智家ヤコブ・ボエーメ、哲学者スピノザ、ショーペンハウエル、宗教開祖イエス、モハメッド、仏陀、に彼は会する。そして仏陀はこの巡礼の最後の安息所となる。若干の箇所でソーヤン・キャケゴーアが指示されている。ダルガスはこの書で、彼の師キャケゴーアと同様な弁証法を用いるが、然しもっと大きな知識と一層広汎な理解によって、個人的な真理の絶対的価値をば、あらゆる実存在する哲学者や宗教家と対せしめて吟味する点で、キャケゴーアを越えて行く。スウェーデンの偉大な文明批評家 *Vilhelm Ekelund* は、この書を読んだ時、「これは明かに世界的文学だ」と言った。エァネスト・ダルガスは、この偉大な小説『最後審判の日の書』を口授し終って数ヶ月後の1899年7月11日に、息を引き取った。彼は余りに神経的に昂奮して居り、余りに肉体的に衰弱していたので、自らペンを取る事が出来なかったのである。彼の死後、永い年月にわたって、彼に注目する人はホンの僅かしかなかった。だが今日、エァネスト・ダルガスへの関心はデンマークに於て漸次高まり来り、彼の本は古書籍商に於ても殆んど手に入れる事が不可能になった。『苦悩の道』と『最後審判の日の書』は、ダルガスが28歳で死ぬまでに経めた一連の重要な作品の内の単に2つのものに過ぎない。コペンハーゲンの王立図書館には、未だ印刷された事のない彼の原稿の多数が保存されている。

ここにも1人のカフカが居る。エァネスト・ダルガスは未だ未来の著述家だ。

(附記。本稿は、*Mogens Poulsen* の頭記の本に関連して、内容に補遺をなしつつ、筆者によって以前に書かれてあったものである。モウエンス・ポウルセンは文芸批評家として著名な人で、さきに画家 *Emil A. Schou* の評伝がある)